

日本も元気にする JICA海外協力隊

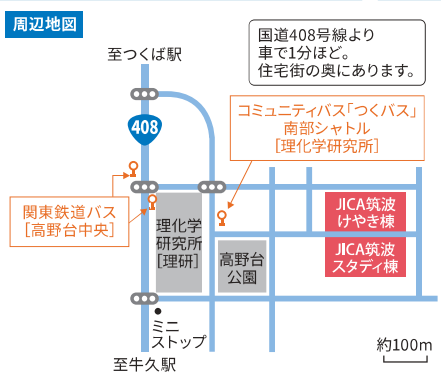
栃木発！



広域地図



周辺地図



JICA筑波 (JICA筑波は、栃木県と茨城県を所管しています)

〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-6
TEL. 029-838-1111 (代表) FAX. 029-838-1119
<http://www.jica.go.jp/tsukuba>

独立行政法人 国際協力機構 筑波センター

その経験を、栃木の未来に。

INTERVIEW
01



小山市出身
村落開発普及員／ポリビア
NPO法人とちぎユースサポーターズ
ネットワーク

古河 大輔さん

INTERVIEW
02



那須烏山市出身
農業土木／モザンビーク
栃木県土地改良事業団体連合会

大貫 泉さん

INTERVIEW
03



宇都宮市出身
看護師／ポリビア
済生会宇都宮病院（助産師）

高橋 規子さん

INTERVIEW
04



河内郡上三川町出身
土壌肥料／コスタリカ
旬の野菜 爽菜農園（市貝町）

宇都宮市出身
自動車整備／ケニア

小野寺 幸絵さん・小野寺 徹さん

INTERVIEW
05



栃木市出身
村落開発普及員／フィリピン
小山市役所

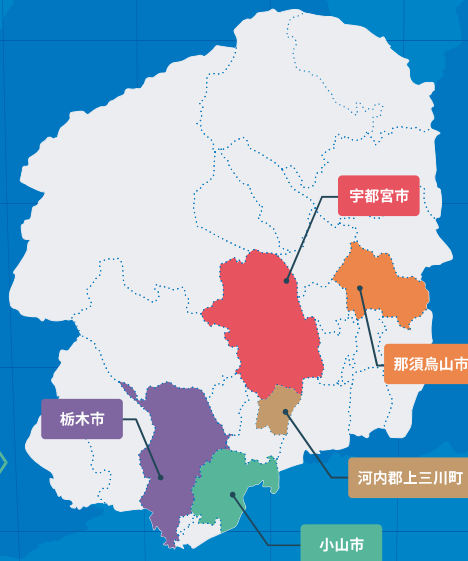
片柳 剛展さん

青

年海外協力隊として開発途上国の課題解決に取り組み、
帰国した人数が4万人を超えています。

彼らは2年間にわたる開発途上国でのボランティア活動を通して、
異なる文化や生活、価値観に触れながら、
広い視野や豊かなコミュニケーション能力、課題解決力を磨いてきました。
青年海外協力隊としての活動は、赴いた国のためだけでなく、
隊員一人ひとりの人間としての成長にもつながっています。
さらに、その経験は、日本の地域社会にとっても貴重な財産です。

Tochigi »
栃木県



このパンフレットでは、隊員の皆さんが赴任先の国々でどのような活動をし、
そこで得た経験を帰国後にどのようなカタチで活かしているのかをご紹介します。

これから青年海外協力隊を志す皆さんも、帰国後のことまで視野に入れて参加することで、
海外での2年間はきっとより素晴らしい価値を持つはずです。

世界を元気にした人は、栃木も元気にできる。

さあ、あなたも参加してみませんか。

世界の国々のために、あなた自身のために。

そして、私たちの国と地域社会のために。

LET'S DO IT TOGETHER!



ひとりで出来ることには限界がある。 周りを巻き込む「チカラ」を大切に。

南米大陸のほぼ中央に位置する内陸国ボリビア。

4,000m以上のアンデス山脈が国土にまたがるこの国は、
ラテンアメリカにおいては最も貧しい国の一つとされている。



古河 大輔

フルカワ ダイスケ

NPO法人とちぎ
ユースサポーターズネットワーク

インテリア業界での社会人経験を経て
2007年1月より2年間村落開発普及員として
ボリビアで活動。
帰国後は経験を活かし、NPO法人で地域の
活性化と若者の人材育成を行っている。

海外で自分の経験を活かした 仕事がしたい。

中学生の時に観た海外でボランティア活動を行う日本人のドキュメンタリー番組に刺激を受けた。
「将来は自分も海外で社会貢献したい」と大学では文化人類学を学び、卒業後は社会を学ぶためにインテリア会社に就職。社会人経験を経て青年海外協力隊としてボリビアへ赴任した。

会計室から生まれた人との つながり、ネットワーク

「実際の活動内容は生活の質向上プロジェクトの企画立案、そのための地域調査でしたが、赴任して半年間は職場の事情でデスクが会計室に置かれていました。しかし、そのおかげでお金の流れや、プロジェクトの進め方が掴め、地域の人たちとの交流も増やすことができました。」



集落の小学生・中学生と植林活動

会計室で生まれた地域の
人たちとの出会い。コミュニケーションが図られ、その後現地での活動をスムーズに進めることにつながった。

家族のように 接してくれた 現地の人たちに感謝。

活動中、特にお世話になった同僚のサンディー一家。



子どもたちに菜園づくりを伝えるため学校訪問

「クリスマスやお正月などの年中行事の時にはいつも声をかけてくれました。もともと穏やかで気さくな国民性の人たちなので、不安だった言葉の壁もすんなり乗り越えることが出来ました。」
日本から来た青年を本当の家族のように迎え入れてくれたことが、人と人との関わり方の大切さを教えてくれた。

もっと地元の課題に目を向ける大切さを知った。

2年間の任期中、環境啓発活動や子どもたちの栄養改善に取り組んだ古河さん。帰国後に感じたのは海外に目を向けるだけでなく日本や地元の問題に目を向け、解決していくことの重要性だった。
「協力隊に参加する前は海外の環境に興味を持っていた色々な問題を調べました。しかし帰国してみると、今まで目を向けていなかっただけで、日本にも沢山の問題があることに気付いたんです。」
協力隊での経験により、これまで見えなかった部分も見えるようになり、もっと地域の課題に目を向けていかなければならないと考えるようになった。
現在のNPOでの仕事において、当時の経験があった



現地のNGOと協力しながら地元の小学生に環境教育の授業



水不足に悩む集落のため協力する水プロジェクトメンバー

からこそ人と人をつなぐことが出来ているのだ。

周りを巻き込むチカラが成功を生む原動力。

「ひとりでは何も出来なくて、だから人を巻き込んで物事を解決していかなければ問題解決につながらないんです。」
協力隊時代、一緒に働いていた仲間に「もっと人を巻き込まないといけない。ひとりではなく、みんなで解決していくんだ。」と教えられたという。



担当している都市と地方をつなぐプロジェクト「コンパス」

現在、宇都宮市を中心に、地域の活性化と若者の人材育成を積極的に行っている古河さん。ボリビアで「人を巻き込むチカラ」を学べた経験が大きなチカラとなり、担当しているプロジェクトの成功に大いに役立っているのだ。

都内と地方を結ぶ架け橋になる。

今では地元の若者だけではなく、都内に住みながら栃木県の地域活性化に関わり、活躍する場を作るプロジェクトを任されている。
「東京圏から若者を呼び込む『コンパス』という事業はまさに人と人、人と地域をつなげる企画で、地元の方々、企業を始めとする組織、団体の協力なしには成功することが出来ません。だからこれからも沢山の人を巻き込みます。」そう話す古河さんの笑顔はやる気に満ち溢れていた。



職場の方の インタビュー



NPO法人とちぎ
ユースサポーターズネットワーク



代表理事
岩井 俊宗さん



プロジェクトサポート
森 雄史さん

課題解決能力は抜群。なくてはならない存在。

スタート時から一緒に働いているのですが、彼は課題に対して社会の考えと自分の考えを上手くつなげていくことが出来る人物。加えて何事にもチャレンジするモチベーションの高さも魅力的。課題解決の高さは今の職場にも還元されていますし、会社にはなくてはならない存在です。

底抜けに明るい性格は、職場の太陽のような人。

経営者に対しても学生に対しても腹を割って話ができるコミュニケーション能力は現地で経験したことが役立っています。色々な世代の方と話をしながらひとつのプロジェクトをまとめていくことが出来る点は経験の成せる技ですね。

本当の豊かさを感じた経験を通して、 地域に貢献していきたい。

アフリカ南東部に位置するモザンビーク。

世界で最も貧しい国の一つであるといわれており、

慢性的な医師不足の問題や

国民の教育も低い水準にあるなど課題が多い。



大貫 泉

オオノキ イズミ

栃木県土地改良事業団体連合会

栃木県土地改良事業団体連合会に在職しながら、2011年に青年海外協力隊としてモザンビークへ派遣。帰国後は復職。現在は当時の経験を活かして地域貢献活動にも積極的に携わっている。

自分の力不足を感じた最初の半年間。

国民の8割が農業従事者というモザンビーク。農業土木の指導のために派遣された農村地帯は水路の整備に手を焼いていた。

「もともとポルトガル領時代に引かれた水路がありましたが、あちこちで水路の逆流が起こり、田んぼに水が入ってきってしまうような状況でした。見知らぬ土地で、経験の乏しさから本当に自分には指導が出来るのだろうか、効率よく整備を進められないだろうか」と悩む日々が続きました。」

多くの人々の労力を借りて進める大規模な灌漑整備。指導者としてのプレッシャー、そして自身の経験不足からくる情けなさで逃げ出したくなる日もあった。

先輩隊員や現地の人たちの支えが チカラになった。

言葉も十分には分からないし、経験も少ない。そんな中、支えとなったのは現地の人たちとの交流や先輩隊員の

言葉だった。

「日本にいれば相談する人はいくらでもいましたが現地ではそうはいきませんでした。しかし、コミュニケーションが図れるようになる



電気・水道のない集落での生活。お世話になった村のお母さんたちと

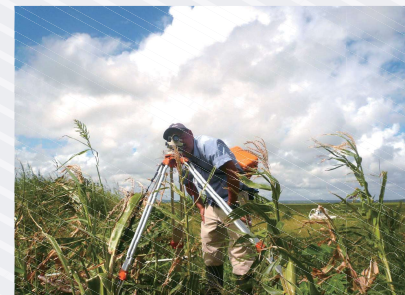
と少しずつ現地の農業普及員の方たちからアイデアを貰えるようになりました。また、先輩隊員や JICA 専門家の方々にわからなければわからないなりに思い切りやってみろ、と言われて吹っ切れました。」
それまで新しく水路をひくことのみに特化していた考え方を、既存の水路を活かした維持管理にシフトした。水路整備に関わる人々への負担が少ないやり方を選んだことが功を奏し、その後は効率よく整備が進んだ。

本当の豊かさが何かを 感じられた。

ホームステイを経験し、モザンビークの文化にも触れた。「とても印象的だったのは貧しい国なのににもかかわらず、お金がなくてもみんな楽しそうに生活をしていることでした。日本のように核家族化が進んでいないため家族の絆の強さを教えてもらいました。」
日本の食事や遊びといった文化を子どもたちに伝えたりもした。帰国するときには遠く離れた空港までわざわざ見送りに来てくれるなど、絆を大切にする温かさ、心の豊かさに感銘を受けた。



地域の人々総出でおこなった幹線水路の清掃



1万2千ha流域における幹線水路の測量

基盤作りこそ農業には大切。

2年間の活動を終えて日本へ帰国。自分自身の考え方に変化が起きていた。

「これまで日本では仕事で農家の方々と関わることも少なく、自分の仕事が本当に人のためになっているのが実感がありませんでした。しかしモザンビークで農家の人々と一緒に仕事をしたことで、農地の基盤作りこそ農業の要であることに気が付いたんです。同時にもっと農業について学ばなくてはならないという気持ちになりました。」

活動を通じて、これまで以上に農業土木という仕事に誇りを持つことができた。また、青年海外協力隊の参加によって数々の出会いがあった。出会った人たちの柔軟なものの考え方が帰国後の仕事に大きく役立っているという。



農地・水保全対策室で活躍中

「これから応募したいと思う方には、経験や技術がないからといって諦めるのではなく、期待とやる気を持ってチャレンジして欲しいと思います。」

不安を乗り越え、かけがえのない経験を積ん

でもらいたいという大貫さんの願いだ。

地域とのつながりを もっと強くしていきたい。

協力隊としての経験が、地域との関わりをもっと強くしたいという気持ちへと変化したという。

「これからは地域と協力して町おこしも行っていききたいと思います。協力隊参加を通して、他の隊員とのつながりも増え、情報交換をする場も増えました。そのおかげでプレゼン能力や人に伝える能力も磨かれました。この経験を活かして地域に貢献していきたいですね。」
ひとりの人間としても成長した大貫さんの情熱は帰国後もますます高まっている。



空いた時間で、水源や水質の調査

職場の方の インタビュー



栃木県土地改良事業団体連合会



総務部
農地・水保全対策室 室長
別井 進さん

人間としてもひと回り成長。
これからの活躍に期待します。

もともと同じ部署の仲間、今は地域と連携していく部署と一緒に仕事をしています。アフリカの大自然の中での経験により、現在はイベントを企画したり、地元の子どもたちに魚の獲り方を教えたりしながら自然の面白さを伝えることができています。仕事に対するやる気も高く、農業土木に関する知見が広がっただけでなく、人間力というものがついたなと感じます。

医療の原点は、お金で買う価値ではなく、 まごころ 真気で接する人との触れ合い。

ボリビアは多民族国家といわれるよう、

様々な文化的背景をもった人々が共生する国である。

高橋 規子

タカハシ ノリコ

済生会宇都宮病院

2003年から2年間、ボリビアの首都ラパスで看護師として活動。帰国後、助産師の道へ進むことを決意し進学。資格取得後、地元の済生会宇都宮病院に就職。2011年より1年間、現職を休職し再度ボリビアへJICA専門家として赴任。

まずは自分が広告塔に。

「ボリビアではお産や予防接種、5歳以下の子どもを対象とした健康診断を行う母子保健センターへ派遣されました。現地では、妊娠、出産と5歳以下の子どもにかかる医療費は自己負担ゼロなのですが、受診する母親、子どもが少ないことが大きな問題でした。適切な医療を受けられないのは、貧しいからではないんだと思ったんです。人々の意識を変えるには、一体何が必要なんだろうと模索しはじめました。」

つたないスペイン語で、母親や子どもたちに身振り手振りで健診の重要性を説いているうち、日本人の高橋さんに会いに来てくれる親子も出てきたという。「自分が広告塔でもよかったんです。スタッフにも、いかに住民とのコミュニケーションが大事かってこともわかってほしかったんです。」

コミュニケーションを重ねて生まれた 信頼関係、同僚達の意識の変化

「日本に興味を持ってくれるようになって、お母さんたちにアドバイスをする機会が増え職場のスタッフから信頼されるようになりました。色々と相談やアドバイスを求められる機会が増えてからは仕事が楽しくなりました。」



職場の同僚と一緒に健診の待合室でお母さんたちに向けて子どもの健康管理についてのワークショップを実施

また赴任当初は計画を実行しようとしても、現地スタッフのモチベーションに差があり苦労した。「そのとき、たまたま同じ地域で行われていた JICA



待合室でお母さんたちと交わす会話の中で、子どもの健康に関するアドバイスを伝えていった

母子保健プロジェクトの研修があり、同僚を参加者に推薦したんです。それをきっかけにスタッフ全体の意識が変わっていったという機会に恵まれたのもありました。」

スタッフの成長、 母親たちの成長が何より嬉しかった

若い少女たちが妊娠し、子どもを産み母親として成長していく姿、看護師たちが努力を重ね、支援者としての成長を遂げていくプロセスを、2年間の年月で共に分かち合えたことが何より嬉しかった。「お産を経験し母親としての自覚が芽生え、予防接種や健診の大切さを学んでもらえたり、スタッフが地道に努力を重ね、母親たちから信頼をよせられる看護師になり自信をつけていく姿を目の当たりにした。女性の健康管理に対する理解、知識が深まれば感染症など予防できる病気で苦しむ人々を減らすことができる！女性には社会を変える力がある！というひらめきが生まれたんです。」

出産、育児とおして、それに関わる多くの人が変わっ



職場の同僚たちと一緒に実施した両親学級

ていく。この経験から今後もお産にのぞむ女性たちと生まれてくる子どもたちの健康を支えたいと思い、帰国後高橋さんは助産師を目指した。

健康な人たちをもっと増やしたい。 だからこそ日本の問題にも目を向ける。

帰国後、進学し助産師の資格を取得後、地元の済生会宇都宮病院に就職した高橋さん。

「日本にも医療を受けたくても受けられないなど、複雑で解決できていない独自の問題があると気が付きました。帰国して日本を見つめ直したときに、自分の国への貢献も、日本人の一人として大事な役目だと感じたんです。」

就労などのために日本に住む外国人が、日本人同等に

健康な生活ができる環境を作りたい。地元、宇都宮でも何か出来ないかと相談会を開催したり、看護師の立場を活かした活動を積極的に行うようになった。



女性が母親になっていくお手伝いができることにやりがいを感じると話す高橋さん



生まれてきた子どもを、お世話になった高橋さんに抱いてほしいと嬉しそうに話す現地のお母さん

分け隔てなく接することこそ私の強み。

病院には日本人も外国人も様々なバックグラウンドを持つ人たちが訪れる。高橋さんは言う。

「自分も途上国に派遣されて、右も左も分からない状態の中、助けてもらった経験がある。だからこそ分け隔てなく先入観を持たずに接して、ひとりでも多くの女性に、素晴らしいお産の経験をしてもらいたい。そして、今後も日本でもっと助産師としての経験を積み、さらに母親としての経験も活かして、いつかまた途上国の子どもたちの役に立てたらいいと思います。」

高橋さんは今でも協力隊の経験を活かして自己研鑽を続けている。



看護課長・助産師
矢口 千秋さん

分け隔てなく人と 接することが出来る優しさが魅力

誰にでも分け隔てなく、優しく接してくれて人間としても素晴らしい。海外の方が来た場合に身構えてしまうけど、彼女は心を開いて接してあげることができるんです。また、経験が豊富なので何事にも多面的に物事を考えることができるのが魅力です。

職場の方の インタビュー



済生会宇都宮病院

生きていく基本は農業。 私たちの経験を後輩たちに伝えたい。

東アフリカに位置し、活力ある首都ナイロビがある

赤道直下の国、ケニア。

カリブ海に面し、豊かな自然があり軍隊のない国、コスタリカ。

ご夫婦で個人農園を営み、後輩の育成にも尽力している

小野寺夫妻に当時の様子を伺った。



小野寺 徹

オノデラ トオル

「旬の野菜 爽菜農園」経営

1993年から2年間、ケニアで自動車整備士として活動。帰国後は農業に従事。同じく協力隊として派遣された幸絵さんとともに有機野菜をつくる「爽菜農園」を経営。

自分の技術を海外に伝えたい。

自動車メーカーの整備士として働いていた小野寺徹さん。自らの経験を活かして、海外に技術を伝えたいと青年海外協力隊に応募。自動車整備士としてケニアへ赴任した。「配属されたのは、首都ナイロビから 50 キロ離れたナショナルパーク。そこは想像していたようなサバンナではなく、山間部にある自然公園でした。」

広大な野生動物保護区管理のためにレンジャーが使用する警備車両の整備と、同僚への技術指導が主な仕事だった。



レンジャーの車両を整備中、時には大型車両も整備

慣れない土地で言葉の壁にぶつかった。

初めは言葉の壁にぶつかった小野寺さん。「ケニアは公用語が英語ですが、国語であるスワヒリ語や民族特有の現地語もあって 3 種類の言葉を上手く組み合わせるのに苦労しました。」

職場の仲間から教わり、3 カ月すると現地の人とコミュニケーションをとれるようになり、仕事もスムーズに行えるようになっていった。

大自然の中からこそその経験も。



当時住んでいたナショナルパーク内の家の前で

大自然の中での仕事でもあり面白い経験をした。

「活動中は独り暮らしをしていたのですが、ある日家に帰ると玄関の前に象がいたり、朝目を覚ますと目の前

にバッファローの群れがいたりと大自然ならではの経験をしました。」

他の隊員も経験しないような場数を踏んで、何事にも動けない精神力の強さを身につけた。

生きていく基本は農業である。

任期を終えて日本に戻る頃、小野寺さんの中で帰国後は農業に携わりたいという思いが芽生えていた。

「ケニアの大自然に触れて生活する中で、生きていく基本となるのは農業だと感じたんです。だから帰国後は農業を仕事にしようと決めていました。」

動物は草を食べて排泄をし移動する。また戻ってくる頃には草が生え、動物はそれを食べるという生きる基本を目にし、有機農業を始めるきっかけとなった。2 年間の堆肥製造研修を経て、現在は有機野菜と有畜複合農業に携わっている。これから青年海外協力隊に参加する隊員の育成にも積極的に携わっており、協力隊の経験を活かして町おこしや海外支援など複数の事業を掛け持ちし、忙しい毎日を送っている。

小野寺幸絵

オノデラ サチエ

「旬の野菜 爽菜農園」経営

大学で土壌学を研究。1997年に土壌肥料の指導者としてコスタリカへ派遣。帰国後も経験を活かし、ご主人である徹さんと一緒に有機野菜の栽培に従事している。

学んできた土壌研究を海外で活かしたい。

大学で土壌研究をしていた幸絵さん。青年海外協力隊にずっと行きたいと思っていたところ、協力隊の職種の中に「土壌肥料」があることを知り応募した。「農業の分野では難しいかもしれないけれど、『土壌肥料』であればこれまで学んできたことを活かせるかもしれないと思いました。実際に合格したコスタリカでの仕事は、ゴミを分別して生ゴミを収集して堆肥を作るという要請内容だったので、実際の経験も積みたいと思い、派遣前に個人的に堆肥製造会社で 3 か月ほど研修を受けてから現地へ赴任したんです。」

同期隊員と助け合い 挫けそうな心を奮い立たせた。

配属先の農協では、既存の堆肥工場で堆肥製造の指導をしようと思っていたが現実とはそうではなかった。「現地に赴任してみたらゴミの分別は全くされていない堆肥工場もない、何もなされていない状況でした。しかし、同じ村に赴任していた同期の『家政・生活改善』隊員が村の主婦たちにゴミの分別を教えるという活動をしてい



ゴミの分別や土壌改良についてセミナーを実施

たので、彼女と助け合って挫けそうな心を奮い立たせたんです。そして彼女の社会人経験を活かしたアイデアでプロジェクトの企画書を作成し、



いつでも力になって支えてくれた職場の仲間たち

結果的に村長さんや村の人たち、農協の組合長までも動いてくれるようになり、堆肥製造まで取り組めるようになりました。きっとひとりだったらできなかったらと思う思います。」大学を卒業したばかりで社会人経験もなく自信を失いかけていたが、同期隊員がチカラを与えてくれた。そして最後には農協の組合長を動かす原動力となったのだ。

これからの人材育成に力を入れていきたい。

帰国後すぐに、同じく堆肥製造を行っていた現在のご主人と出会う。「当時、農業分野の協力隊員の派遣前技術補完研修制度が始まったんです。もともと有機農業を初めた時から研修生を受け入れたいと考えていました。」自分たちが学んできたこと、経験を後輩に伝えていきたいという小野寺夫妻。今は協力隊の研修生だけでなく、農業を軸に自立した生活を送りたい若者の支援も行っているとのこと。協力隊に参加してみたいと少しでも思うならば、まずは飛び込んでみるのが大切と熱いメッセージを頂いた。



研修生を指導中

現地での草の根活動が、私の財産。 人とのつながりを大切にしていきたい。

7,000を超える島とつながるフィリピン。

陽気でホスピタリティある人々の活気が街にあふれている。



フィリピン
Philippines

片柳 剛展

カタヤナギ タケノブ

小山市役所

小山市役所在職中に青年海外協力隊へ応募。2008年より2年間市役所を休職して、村落開発普及員としてフィリピンへ派遣。漁村の組織化を推進。帰国後は小山市役所へ復職し、東日本大震災の際には被災地支援の派遣職員として活動。

ゼロから集落を組織化していく 大変さを知る。

現地で任された仕事は漁業で生計を立てる集落の組織化だった。

「赴任して担当を任された仕事が漁村を組織化していく活動でした。集落自体もまとまっておらず業務の中身は不透明だったので、まず始めたのは、どこでどの人が漁業を行っているのかを把握する基礎調査からでした。」

配属先の同僚と共に、個人名簿作りから始め問題点を把握するために質問票を作成するなどしたものなかなか思うようには前に進まなかった。

ひとつのアイデアが 前に進むきっかけを作ってくれた。

現地は公用語が英語であったが現地語でないとコミュニケーションが取れない場面が多かった。また、いくつか組織の立ち上げに成功したもののミーティングに人が集まらない、毎回出てくる議案は融資などお金の話ばかりと具体的な活動をスタートさせるには一筋縄ではいかない状況が待っていた。



村に入っている聞き込み調査

「ちょうど私が派遣されて1年くらい経った頃にアメリカの海洋資源ボランティアの方たちが入ってきて、他の地域での成功事例を教えてくださいました。それが



公私ともにお世話になった職場の同僚とその家族

きっかけとなり活動が少しずつ前に進み始めたんです。」

禁漁区を作り漁業を守るという事例に、現地の人たちの意識が変わり難航していた組織化が前に進んだ。

草の根運動を経験できたことは私の財産。

派遣されたタナウン町には54ヶ所もの集落があり、まとめていく活動は大変だった。

「日本では町内会、自治会等、コミュニティが組織化されていますが、フィリピンにはそうした環境がないので草の根運動をしないと何も始まらないんです。しかし、その活動が地元の人たちとつながるきっかけにもなりまし、信頼関係が生まれ、小学校で環境教育の授業をする機会も作ってもらえました。日本にいたら出来ないであろう経験は財産です。」

携わっている仕事の流れを より深く掴めるようになった。

2年後日本へ帰国。帰国後は小山市役所へ復職。「仕事の上で国の政策・事業がどう地域で具体化されて



アメリカのボランティアと連携して実施した小学校での環境教育



集落で立ち上がった組織のミーティング

いくか、一方、政治経済といった世界的事象とどう結びついているかこういったミクロとマクロの視点を意識して仕事に取り組めるようになりました。」
集落をまとめていくという地域の知見を養った活動が仕事に大きく役立っているという。

東日本大震災で感じた つながりの大切さ。

帰国後に起きた東日本大震災。片柳さんは小山市の実施する被災地への支援職員派遣に率先して手をあげた。「税務課に派遣されたのですが、そこには震災によって大きな不安を抱えた人たちがたくさんいました。そんな中、協力隊で学んだ『聞く』という経験が活かされ

ました。また当時多くの協力隊経験者が被災地に入り、復興支援活動を行っており、私も現地で出会った協力隊OBOGの仲間と一緒に支援活動に取り組みました。」



総務部で職員がより良く働ける環境作りに励む片柳さん



職場の方の インタビュー

小山市役所



総務部 職員活性課 課長
小森谷 昌利さん

物怖じせずやり遂げる忍耐力と
臨機応変さが彼の魅力です。

後輩への指導力があり、任せた仕事はいつの間にか終わっていたりと、協力隊時代に培われたのでしょうか、物怖じしない点や根気と粘り、臨機応変さは今の部署においても役立っています。今後、ボランティアや市民と関わる仕事はもちろんのこと、どの部署でも協力隊での経験を活かしてくれると思います。



栃木県出身JICA海外協力隊派遣実績



昭和41年(1966年)～令和6年(2024年)1月31日現在の派遣累積数

青年海外協力隊／海外協力隊…**673名** 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊…**21名**
シニア海外協力隊……………**77名** 日系社会シニア海外協力隊……………**4名**

累計
775名
85ヶ国



青年海外協力隊とちぎ応援団 会長 岸本 卓也

青年海外協力隊員は、いつか世界を変える力になる、と信じ、言葉も風習もまったく違う国の発展のため、奮闘しています。この崇高な活動を支援しているのが青年海外協力隊とちぎ応援団です。2003年の設立から15年間で開催した壮行会は56回を数えます。とちぎ応援団は帰国隊員とも連携し、海外協力隊事業が栃木県の活性化にも寄与できるよう協力していきます。



栃木県青年海外協力隊OB会 会長 大貫 泉

現地の人たちと同じ生活をしながら活動を続けた2年間の経験は、これまで日本社会になかった新しい考え方や価値観をもたらしてくれると思います。また、日本から離れて、日本社会を見つめることで、日本社会の素晴らしさを再確認させてくれると思います。現地での生活はドキドキ、ワクワクすることが多く、2年間という時間があっという間に過ぎていきます。協力隊の仲間や現地の仲間は、一生大切な宝だと思います。JICA海外協力隊に参加するには、不安もいくつかあるかと思いますが、是非とも参加して素敵な宝を得てください。



アジア

国名	累計	()内は女性隊員内数
インドネシア	9	(6)
マレーシア	22	(3)
フィリピン	23	(7)
タイ	24	(10)
カンボジア	12	(5)
ラオス	14	(6)
東ティモール	1	(1)
ベトナム	7	(4)
中華人民共和国	9	(7)
モンゴル	6	(0)
キルギス	2	(0)
ウズベキスタン	4	(3)
ブータン	14	(8)
バングラデシュ	16	(7)
インド	3	(1)
モルディブ	5	(3)
ネパール	24	(12)
パキスタン	2	(2)
スリランカ	16	(10)
人数	213	(95)
国数	19	(17)

中東

国名	累計	()内は女性隊員内数
ヨルダン	15	(4)
シリア	10	(3)
エジプト	1	(1)
モロッコ	14	(4)
チュニジア	8	(4)
人数	48	(16)
国数	5	(5)

アフリカ

国名	累計	()内は女性隊員内数
スーダン	3	(3)
ボツワナ	4	(2)
エチオピア	8	(3)
ガーナ	22	(13)
ケニア	29	(12)
リベリア	5	(1)
馬拉ウイ	34	(9)
ナミビア	3	(1)
南アフリカ共和国	2	(0)
ウガンダ	4	(3)
タンザニア	27	(8)
ザンビア	24	(9)
ジンバブエ	9	(3)
ベナン	6	(6)
ブルキナファソ	3	(1)
カメルーン	4	(1)
コートジボワール	1	(1)
ジブチ	5	(2)
ガボン	2	(1)
マダガスカル	5	(3)
モザンビーク	8	(4)
ニジェール	6	(4)
ルワンダ	9	(8)
セネガル	20	(10)
人数	243	(108)
国数	24	(23)

欧州

国名	累計	()内は女性隊員内数
ブルガリア	1	(1)
ルーマニア	1	(1)
ハンガリー	1	(1)
ポーランド	3	(0)
人数	6	(3)
国数	4	(3)

北米中南米

国名	累計	()内は女性隊員内数
ベリーズ	1	(1)
コスタリカ	15	(7)
ドミニカ共和国	7	(3)
エルサルバドル	4	(1)
グアテマラ	12	(8)
ホンジュラス	25	(11)
ジャマイカ	8	(3)
メキシコ	8	(4)
ニカラグア	13	(10)
パナマ	8	(4)
セントルシア	3	(2)
セントビンセント	1	(1)
アルゼンチン	4	(1)
ボリビア	29	(19)
ブラジル	18	(11)
チリ	2	(0)
コロンビア	6	(2)
エクアドル	13	(8)
ガイアナ	2	(0)
パラグアイ	14	(7)
ペルー	6	(2)
ウルグアイ	2	(1)
ベネズエラ	1	(1)
人数	202	(107)
国数	23	(21)

大洋州

国名	累計	()内は女性隊員内数
フィジー	10	(4)
キリバス	2	(1)
マーシャル	5	(2)
ミクロネシア	4	(2)
バブアニューギニア	17	(0)
ソロモン	4	(1)
トンガ	2	(1)
バヌアツ	2	(1)
サモア	9	(5)
パラオ	8	(5)
人数	63	(22)
国数	10	(9)